

ペリー艦隊の対中・日・琉関係の認識

修 斌 ・ 劉 嘯 虎

The understandings of Perry's squadron to China-Japan- Ryukyu relationships

Xiubin Liuxiaohu

Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan is an official report being submitted after the USS East India squadron (Perry's squadron) returned back to America, which is a precious record in research Ryukyu Kingdom of the second half of the nineteenth Century. In *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan* records, Ryukyu Kingdom tried to keeping the identity of a vassal state of East Asian tributary system, keeping in touch with China in terms of tribute trade and accepting canonization, and maintained the identity with the inheritance of Chinese culture. At the same time, Ryukyu Kingdom had to endure the press and control from Satsuma domain of Japan, while Ryukyu must maintain its image of "independent country" to foreign countries. Visibly, the Ryukyu was in an embarrassing state of foreign relations. The "sovereignty" of Ryukyu kingdom belongs to China, the "governance" of which belongs to Japan. However, this "sovereignty" of China is a unique right which is a symbol of a vassal state and suzerain in the East Asian tributary system. The "governance" of Japan was enforced in Ryukyu through "consul" and "garrison" of direct controlled by Satsuma domain in Bakuhan Taisei. The national consciousness and the self localization of Ryukyu is that Ryukyu is a vassal state of China and Japan is a neighbor of Ryukyu. However, the former is a conscious identity to culture and value, and the latter is a helpless and false cognation. So, the embarrassing relationships between Ryukyu and China, Ryukyu and Japan were the legal position of Ryukyu, but the two relationships are widely different. The confusion and puzzle that Perry and his staff showed about the position of Ryukyu comes not only from the policy of control which had been subtle by Satsuma domain, but also from the lack of awareness of Westerners to the special tribute system of East Asia World.

Keyword: *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan*; Perry; Ryukyu; China; Japan; the USA.

はじめに

『ペリー艦隊日本遠征記』(Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan) は、アメリカ海軍の東インド艦隊、すなわちペリー艦隊がアメリカに戻った後で提出され

た公式報告書である。ペリーの来航や日本開国などを研究する際よくこの報告書が利用されている。また、『日本遠征記』の中、琉球に関する記載もあり、それらは19世紀後半の琉球王国を研究する上で貴重な史料である。

これまで、琉球開国及び当時の日琉・日薩関係についての研究成果は少なくない。加藤祐三氏『黒船異変——ペリーの挑戦』(岩波新書1988年)と『幕末外国と開国』(ちくま新書2004年)、紙屋敦之氏『歴史のはざまを読む 薩摩と琉球』(榕樹書林2009)と『東アジアのなかの琉球と薩摩藩』(校倉書房1990年)、真栄平房昭氏「16-17世紀における琉球海域と幕藩制支配」(『日本史研究』第500号)、横山伊徳氏「日本の開国と琉球」(『東洋学報』76-3、4)などが挙げられる。特に、西里喜行氏は『清末中琉日関係史の研究』(京都大学学術出版会2005年)において、日本開国前後の琉球「所属」論争をめぐる幕府と薩摩の対応を分析し、「琉球王国は日清両属の状態に加えて更に新たな国際秩序の中へ編入され、国際法の下における「所属」問題の決着を先延ばしにされたまま、なお国際秩序再編成の渦中で「主権」保持の努力を継続する」と指摘した。学者達は当時の琉球王国の対外関係に関する研究する際、『日本遠征記』を含めて関係資料を利用したが、ペリー艦隊の「認識」(欧米人の目で見た)の視角から琉球・日本(薩摩)・中国の関係を考察し、琉球の国際的位置づけを明らかにしようとする研究はまだ見られない。これが本論文の意図である。

『日本遠征記』における記載から、琉球がその東アジア封貢体制における属国としての地位を極力保持し、朝貢貿易と冊封を受け入れることによって中国と密接な関係を保ちつつ、地位とアイデンティティを維持しようとしたことがうかがえる。一方で、琉球は日本の薩摩藩による搾取と支配に耐えることを余儀なくされ、よりいっそう、対外的にはなお独立国家としての姿の維持に努める必要があった。ペリー艦隊の観察、叙述から次の二点がうかがえる。一点目は、当時、琉球の「主権」(支配権)は中国にあり、「実質的支配」は日本にあった——しかし中国のこの「主権」とは封貢体制に特有の、宗主国が藩属国に対する象徴的な意味合いの強い権利であり、一方で、日本の「実質的支配」とは、幕藩体制下の薩摩藩を通じた琉球における「日本領事」、「駐留軍」といった直接制御によって強固に実現していたものである。二点目として、琉球の国家意識と自らの位置づけとは、即ち琉球は中国の「外藩」であり、日本は琉球の「近隣」であるというものであった。しかし、前者はより文化と価値についての自覚認識であるのに対し、後者はというと対外的に示された、やむを得ない、虚偽の「認知」なのである。このことから、琉球の中国および日本との間における不自然な「両属」関係は、当時における琉球の地位の実態ではあるが、「両属」の性質は全く異なるものであったことが分かる。

一、実像と虚像：琉球に対するペリー艦隊の初歩的認識

1853年7月8日、アメリカ海軍提督ペリーが艦隊を率いて江戸湾に侵入し、徳川幕府に開港するよう要求した。これは日本の歴史上有名な「黒船事件」である。1854年2月13日、ペリーが再び艦隊を日本に押し寄せ、幕府はやむなく開国の要求を受諾した。日米両国は3月31日、横浜で「日米和親条約」を調印した。これによって、日本の鎖国状態は終わりを告げ、幕藩体制は瓦解の一途を辿っていった。日本の歴史も近代へと歩み始めたのである。ペリー艦隊がアメリカに引き上げた後、米国国会に『日本遠

征記』と題する公式な報告書を提出した。この報告書はペリー艦隊や日本の開国事情などを研究する重要な資料となり、また琉球王国に関する貴重な歴史記録ともなった。

実際、1852年11月、ペリー艦隊がアメリカ本土を出発した後、大西洋、インド洋、シンガポール、中国の広東省・上海、琉球、小笠原諸島などを經由して、ようやく日本に到着したのである。1853年5月26日、ペリー艦隊が初めて琉球の那覇に上陸し、当地で薪水の補給を受けた。その間、船員たちは各種の実地調査を行ったばかりでなく、ペリー自身も琉球王国の王宮首里城を訪れた。これを最初に、ペリー艦隊が琉球を訪れたことは合わせて5回である¹⁾。艦隊が琉球で石炭の補給地を設置したり、食糧を受けたりした。即ち琉球はペリー艦隊の補給基地となったのである。徳川幕府と条約締結した後、ペリー艦隊が帰国の途中、那覇に停泊した最後の一回は、琉球王国と「琉米修好条約」を調印した。その後、那覇は通商都市として門戸を開放したが、琉球の運命もこれで大きな転換を迎えることになった。

ペリー艦隊が琉球に何回も駐留した間、ペリーとその随員たちは琉球の風土、人文、自然、地理、及び琉球王国の内政外交、わけても琉球と中国、日本の関係などの調査を行い、西洋人の立場からリアルな記録を残している。これらの記録は『日本遠征記』に詳録されたか、或いは別の題名で出版された。いずれも19世紀後半の変動期に置かれた琉球王国を知るための貴重な資料である。

ペリー来航に先んじて現れた琉球の航海記録に関する著書は主に二つある。一つはイギリスの航海者ホール船長が1816年に琉球に来航した時の見聞をもとに書いた“Account of a Voyage of Discovery to the West Coast of Corea and the Great Loo-Choo Island in the Japan Sea”である²⁾。日本語に訳せば、『朝鮮西海岸及び大琉球島航海探検記』である。この本は1818年にロンドンで出版され、西洋世界で琉球諸島と朝鮮半島を詳細に記述する最初の著作であるといわれる。出版後2年間も経たないうちに、オランダ語、ドイツ語、イタリア語などに翻訳された。英語版も幾度となく再出版を重ねた。琉球に対する西洋人の認知はこの本から得たものが多く、ペリー艦隊も例外ではない³⁾。

もう一つ、ペリー艦隊が事前に琉球に関する知識を得たのは、時間的にもっと近い“Lewchew and the Lewchewans, being a Narrative of a Visit to Lewchew, or Loo-choo in October, 1850”からであり、日本語に訳すと、『琉球と琉球人——1850年10月の琉球探検』になる。この本の作者スミスはイギリス聖公会の宣教師として中国に来て、香港で長い間宣教活動を行った。ペリー艦隊が琉球に対し使った呼称“Lew chew”は今挙げた二冊の著書と同じく広東方言のアクセントから来たものであり、このことからペリー艦隊が琉球と中国、日本の関係についてどのような初歩的認知を持っていたかが分かる。そして、ペリー艦隊が広東、上海を經由して琉球に向かったが、広東沿岸に到着した際、香港、マカオ、広州などの地域で一時的に滞在していた。中・琉・日関係に関する調査はすでにこの時から始まったのである。ペリー艦隊が琉球に到着する前、以上のルートを通して入手した琉球の情報の中に正確なもの（実像）もあれば、間違っただけのもの（虚像）もある。『日本遠征記』の中では、スミスが述べた琉球

1) それぞれ1853年5月26日、1853年6月23日、1853年7月25日、1854年1月21日、1854年7月1日の5回である。

2) 他に“Voyage of Discovery to the West Coast of Corea and the Great Loo-Choo Island”、(1818, London)である。日本語訳は須藤利一『バジル・ホール大琉球島航海探検記』（東京：第一書房、1972年）であるが、その中の第一章朝鮮西海岸の部分が省略された。

3) 山口栄鉄『琉球異邦典籍と史料』、沖縄：榕樹書林1977年、P38-45。

と中国、日本の関係は次のように引用されている。

大局的には、琉球は日本から移住者によって植民されたという意見が、最も蓋然性が高いように思われる。日本人と琉球人とは、人相、言語、習慣において、密接な類縁関係にある。一方、琉球人は一部の文明や文学において、日本よりはるかに中国から重要な影響を受けていることも確かである。琉球の政体は、直接日本に従属している文官が行う過酷な寡頭政治であるようだ。この文官たちは日本国を非常に恐れていて、いざという時には中国ではなく日本に保護を求める。二、三百年前の明朝時代、日本と中国の間に戦争が起きた。このとき中国は琉球を日本から離反させようとして、威厳ある独立王国に昇格させたという歴史上の伝説がある。中国の封臣のしるしとして、新しく即位した琉球王はいずれも、特命を帯びて福州から派遣された中国の役人から公式の封爵を受けるのである。琉球からはこの福州へも二年に一度朝貢船が派遣される。約二〇〇年前タタール人（満州族）が中国に侵入し、現在の外国人王朝（清）を創設したとき、タタール式の服装と支配に従うことを嫌った中国の約三六の家族が琉球に移住し、その子孫が琉球の啓蒙者となって、国民と融合していった⁴⁾。

スミスの記述の中に種々の間違いがあることは言うまでもない。明代万暦年間に起きた中日戦争の起因を間違えたり、「閩人三十六姓」が琉球に到来した時間と理由も間違えた。しかし、スミスが琉球と中国の朝貢関係や文化的影響を比較的正確に記述したのは確かであり、これは西洋人の最初の認識である。琉球に対するペリー艦隊の認知にも影響した。

ホールの『朝鮮西海岸及び大琉球島航海探検記』がペリー艦隊に与えた影響は一番大きい。したがって、ペリーを含めた多数の執筆者は『日本遠征記』の中で、よく琉球王国の実情を『朝鮮西海岸及び大琉球島航海探検記』の記述と比較検討していた。その結果、この本は真実と嘘が混在し、間違いが決して少なくないことが分かった。いかなる理由によるか分からないが、ホールは大いに美化した手法で琉球を描いた。山口栄鉄氏によれば、ホールは琉球をこの世のエデンの園に喩えた。琉球の住民は子供のように無邪気で、見知らぬ外国人を素直な心でもてなし、うそつきや詐欺などは一切しない。だから、金にかかわる闘争や犯罪行為は彼らとは無縁だと説いた⁵⁾。1817年、ホールは大西洋のセントヘレナを経由した時、現地に追放された元フランス帝国の皇帝ナポレオンに訪ねたという。ホールが平和を愛するという琉球人の性格をナポレオンに話すと、ナポレオンは驚いて肩をすくめ、「戦争がない、そんなことはありえない」と述べたという⁶⁾。このことに対し、ペリー艦隊は同様の疑念を持っていた。彼らは琉球

4) オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記』上、第11章、東京：万来舎、2009年4月、P493-494（Matthew Calbraith Perry, Lambert Lilly, Francis Lister Hawks. *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan: performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy*. Appleton and Company, 1856. Chapter 11, P255-P256.）

5) 山口栄鉄『琉球異邦典籍と史料』、沖縄：榕樹書林、1977年、P42-45。

6) オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記』下、第17章、東京：万来舎、2009年4月、P96-97（Matthew Calbraith Perry, Lambert Lilly, Francis Lister Hawks. *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas*

諸島を実際に調査した後、『日本遠征記』の中で「ホール大佐は琉球人に関する興味深い、あまり信頼できない記録」と批判した⁷⁾。なぜなら、彼らは島内で三山時代のグスク遺跡を発見したばかりでなく、琉球人が日本の火器にかなり詳しいことを知ることができたし、島内に日本駐留軍があることさえ聞いたからである。

このように、ペリーが琉球に到着する前、西洋の航海者たちとりわけイギリス人はすでに琉球に関する航海記録を残している。豊かな内容こそあるが、真実でないところがまったくないのではない。ペリー艦隊が琉球に来る前に、これら従来の航海記録の中にある背景知識を念頭に入れながら、実地調査を行うことによって、より客観的で正確な琉球認知を獲得しえたと考えられる。

二、「日本領事」と「日本駐留軍」——ペリー艦隊から見た琉日（薩）関係

1. 「日本領事」

1853年5月26日、ペリー艦隊が那覇に到着した時、琉球と中国、日本の関係を『日本遠征記』の中で次のように客観的な記述をしている。

琉球がどの国に属するかについては、今なお議論が続いている。日本の薩摩侯の属領だと言うものもあれば、中国の属領ではないかと言うものもある。日本国に属しているのはほぼ確実らしいが、中国に貢物をおさめていることにも疑い余地はないため、いくらかは中国にも従属しているのだろうと思われる。言語、習慣、法律、服装、道德、風習及び通商関係などから見ても、やはりこの見解に落ち着く。しかし、この問題についてはまたあとで述べることにする⁸⁾。

ペリー艦隊が琉球に滞在した間に、十分な証拠を収集した。琉球が中国文化の影響を強く受けていると信じる一方、日本からの統制も受けているという形跡も察した。艦隊が琉球に到着した翌日の5月27日、船員是那覇から北へ向かって出航していく何隻かの船を発見した。これらの船がペリー艦隊が通過した時、近いところからアメリカの軍艦を観察していた。これらの船は報告のために日本へ派遣されるものであるとペリー艦隊は確信していた⁹⁾。

and Japan: performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy. Appleton and Company, 1856. Chapter 17, P369.)

7) 同上

8) オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記』上、第7章、東京：万来舎、2009年4月、P340（Matthew Calbraith Perry, Lambert Lilly, Francis Lister Hawks. *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan: performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy. Appleton and Company, 1856. Chapter 7, P175.)*

9) オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記』上、第7章、東京：万来舎、2009年4月、P343（Matthew Calbraith Perry, Lambert Lilly, Francis Lister Hawks. *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan: performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy. Appleton and Company, 1856. Chapter 7, P175.)*

5月30日、ペリー艦隊は将校4名に船員4名と中国人役夫4名を随行させ、12人からなる調査チームに武器を持参させながら琉球に上陸させ、島内部に深く徒歩調査を行わせようとした。琉球政府は官員を同行させたが、実は道案内を名目に監視役に当たらせたのである。調査チームは島で一か所の立派な家屋を見つけた。すると、家の主人は丁寧に調査員たちを屋内に招き入れ、お茶をもてなした。言葉が通じないため、双方はそれほどの会話ができなかった。しばらく休んだ後、調査チームは再び出発した。それでチームの中の中国人役夫はアメリカ将校たちに「あの家の持ち主は実は『日本領事』だ」と教えた¹⁰⁾。『日本遠征記』の原文では「Japanese Consul」と記されている。この言葉に、アメリカ人がこの主人の身分をどのように理解したかが反映されているのであろう。このいわゆる「日本領事」は薩摩藩が琉球に派遣した「在藩奉行」にほかならないと考えられている。

1609年薩摩が琉球を侵略した。薩摩軍が引き揚げる時、鎮守として留った本田親政と蒲地休右衛門が奉行の始まりであった。1631年に、正式に那覇で「在藩奉行」を派遣し、その任期を三年とした。在藩奉行の邸宅は「仮屋」と呼ばれる。ペリー艦隊の調査チームが招き入れられた立派な家屋はまさにこの「仮屋」であろう。「在藩奉行」について日本の学者宮城栄昌氏は「在藩奉行の職務中、内政・外交監視と進貢貿易の督励とは最も重要であった」と指摘している¹¹⁾。

日本の史料によると、ペリー艦隊が琉球に滞在していた間、琉球駐在の薩摩藩の在藩奉行はその責任を忠実に履行したという。薩摩藩在藩奉行郷田中兵衛、谷川次郎兵衛と警備川上式部は嘉永六年六月十二日（1853年7月6日）から薩摩藩へ報告書を送り始め、琉球におけるペリー艦隊のすべての動向を詳しく報告した。これらの報告書は目を見張るほど詳細なものであり、ペリー艦隊の人員、装備や、毎日の立ち居振る舞いなど、一々正確に記録しただけでなく、琉球側が艦隊に提供した石炭、家畜、食糧、野菜などの補給物までにおよんでいた。ペリー艦隊から琉球側に送られた贈り物も言うまでもなく在藩奉行の報告書の中に余すところなく記入された。ペリー艦隊と琉球側の間で行われた交渉についての詳しい内容も、在藩奉行の報告書の中に完璧に見て取れる¹²⁾。

ペリーがアメリカの特命全権大使と艦隊司令官の身分で首里王宮に訪ねたいと琉球官員に願い出たことがあるが、その際琉球官員は「国王はまだ幼少で、王太后も重い病気にかかったので、驚かされてはならない」ことを理由にごまかそうとした。このような交渉の細部も薩摩在藩奉行によってそのまま報告書に記入された。また琉球側からペリー艦隊に送られた公式な書状に対するペリー艦隊側の返信までもなんと報告書にそのまま記録されている。さらに、ペリー艦隊の第五回目の琉球訪問の間、一つの悪質な事件が起きた。ある米軍水兵が飲みすぎ、那覇の町中で暴れ回って、民家に不法侵入して琉球人の

10) オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記』上、第8章、東京：万来舎、2009年4月、P378（Matthew Calbraith Perry, Lambert Lilly, Francis Lister Hawks. *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan: performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy*. Appleton and Company, 1856. Chapter 8, P187-P194.）

11) 宮城栄昌『琉球の歴史』、東京：吉川弘文館、1977年、P108。宮城栄昌・高宮広衛編『沖縄歴史地図』、東京：柏書房、1983年、P22。

12) 洞富雄訳『ペリー日本遠征随行記』（Samuel Williamsの*A Journal of the Perry Expedition to Japan 1853-1854*の日本語訳）、東京：雄松堂1989年、P447-527。

婦人に暴行しようとしたところ、怒りに燃えた琉球庶民に殴られ、慌てて逃げたあげく川に落ちて溺死した。この事件をめぐってペリー艦隊は琉球政府と複雑な交渉と外交文書のやりとりを交わしたが、結局は琉球地元の法律に基づいた裁判が行われ、ペリー艦隊びいきの立場から処理された。この過程に交わされた一連の文書は一つ残さず薩摩在藩奉行の報告書に記入された。

ペリー艦隊の五回目の琉球訪問中、在藩奉行の報告書は大体十日間に一回の頻度で出され、対米交渉の参考情報として薩摩藩に提出されていたのである。これらの報告書は情報の出所について言及せず、また在藩奉行とペリー艦隊の直接な交渉ぶりについても記述していなかった。しかし、ペリー艦隊と琉球王国の往来情報をこれほど効率的で正確に収集しえたと考えれば、琉球政府の周密な監視や命令による情報収集活動がなければ到底できなかったはずであろう。

したがって、例的那覇から日本へ報告に出向いた船は、おそらくこの「在藩奉行」が派遣したものであろうと想定される。彼が調査チームのメンバーたちにお茶のもてなしをしたのも、礼儀によるものだけではないに相違ない。この実際の面会から、彼はいったいペリー艦隊のメンバーたちから何を知りえたか、知る由はないが、日本と琉球の関係、正確に言えば薩摩藩がどれほど琉球を支配していたかは、この出来事からうかがい知ることができるのではないか。

2. 「日本駐留軍」

当時、ペリー艦隊の調査チームは二つのグループに分けて、それぞれ調査を行った。また、両チームは調査が完成したら、島のあるところで合流しようと約束した。一グループは少し早めに合流場所に着いたが、もう一つのチームに方角を指し示すために、隊長のアメリカ将校は空に向けて発砲した。百人余りの琉球住民はその場面を見て驚くばかりか、面白そうに感じた。琉球人はアメリカ人将校が使った武器にたいへん面白がって、それは彼らが今まで日本の鉄砲しか見たことがなく、もっと近代的な西洋式武器を目にしたことがなかったからである。アメリカ式のライフル銃は元込め式のもので、先込め式の日本火縄銃しか見たことがない琉球人の興味を大いにそそったのである。また、アメリカの調査員たちは新しい発見をした。

彼らは火薬の性質や短剣の使い方を知っているようだったが、この探検の間、武器はいっさい見かけなかった。那覇と首里には日本の守備隊が屯駐しているということだったが、もしいたとすれば、われわれを警戒して避けていたのだろう¹³⁾。

琉球で武器が見つからなかった理由に、薩摩藩が琉球人の武器保有資格に厳重な取り締まりを行ったことが挙げられる。事実、早くも1522年、尚真王は「刀狩令」を打ち出し、琉球全国の武器を没収した。

13) オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記』上、第8章、東京：万来舎、2009年4月、P407（Matthew Calbraith Perry, Lambert Lilly, Francis Lister Hawks. *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan: performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy*. Appleton and Company, 1856. Chapter 8, P207-208.）

このため、琉球王国の武備は遅れを取るようになった。にもかかわらず、薩摩人が琉球での帯刀はごく普通なことである。例えば1576年冊封使として琉球に派遣された蕭崇業は「琉球に日本館があり、そこに集まる人何百人、冊封使の船を待っている。これと商売を行った。その人たちが出入りする時皆刃物を携帯し、琉球の人々はこれを非常に恐れた¹⁴⁾」と言った。また1606年に夏子陽が使者として琉球に行ってきたが、「千人に上る日本人が刃物を持って市に現れたのを見て、琉球はすでに日本に屈服しただろう」と報告した¹⁵⁾。1609年に薩摩藩は琉球に侵攻した後、琉球の武器を点検したところ、弓500本、銃300挺、甲冑300具と若干の刀や矛しかないことに気付いた。1611年9月、薩摩藩は捕虜にした尚寧王の送還を承諾したが、その際、薩摩藩への臣服を認める誓約書と琉球国の守るべき「掟十五条」を尚寧王に押し付けたことがある。これによって、薩摩藩は官員の派遣、田地の測量・分配、国境線の画定、税金政策の制定、薩摩藩への朝貢など一連の要求を琉球側に受諾させた。また、薩摩藩は琉球人の武器や生活の営みに必要な鉄器も没収し、厳重な取り締まりを行った。1613年9月24日、薩摩藩はさらに琉球で「兵具改め」を断行し、武器の統制によって、琉球人の武器保有資格を厳しく制限した。これについて、真栄平房昭は「日本社会と比べて、琉球の武士たちは刃物を持たない。このような非武装的な特徴の背後には薩摩藩による強力な武器統制政策という根本的な原因がある。この特徴はのちほどペリー提督の注意も喚起した」と指摘している¹⁶⁾。

『日本遠征記』の中に琉球で長年生活していたイギリス人宣教医ベッテルハイム¹⁷⁾の追想談があるが、これによって、琉球での薩摩藩軍隊の駐在状況が窺える。

1845年9月9日、ベッテルハイムはイギリス海軍艦隊に付いてポーツマスから出発し、翌年の1月に香港に到着、4月30日に琉球の那覇に上陸した後、護国寺で宣教活動を展開した。琉球滞在の八年間、ベッテルハイムは医療事業に取り組んだり、琉球人に種痘の方法を教えたり、『聖書』を琉球語に訳したりした。1847年10月、ベッテルハイムが尚育王の葬式に参加した時、フランス人宣教師と争いを起こして殴り合ったため、琉球政府の監視下に置かれるようになった。ペリー艦隊が琉球に到来し、政府と開港通商の談判を行った時、ベッテルハイムも参与した。『日本遠征記』の中にこのことに関する記述は何か所もある。その後、彼はペリー艦隊と一緒に琉球を離れ、アメリカに住みつくようになった¹⁸⁾。琉球での生活が長かったため、彼は琉球の事情に非常に詳しい人となった。『日本遠征記』は次のように記されている。

14) (明) 喻政主修、林焜 林材総纂『福州府誌万曆本・兵戎誌・島夷琉球』(百度閲読電子書：

<http://yuedu.baidu.com/ebook/4038d111ccbff121dd3683d6.html>を参照)

15) 同上

16) 真栄平房昭「16-17世紀における琉球海域と幕藩制支配」、『日本史研究』第500号、日本史研究会、2004年4月。

17) ベッテルハイム (Bernard Jean Bettelheim、1811年-1870年)、イギリス国籍のユダヤ人宣教師かつ医者で、はじめて琉球に行ったキリスト教会士である。中国名「伯德令」という。1846年琉球に到着。

18) 照屋善彦『被理与伯德令在琉球—美提督与英传教医生・一八五三—五四四年』、『第五届中琉历史关系学术会议论文集』、福州：福建教育出版社1996、P196-217

またhttp://en.wikipedia.org/wiki/Bernard_Jean_Bettelheimと<http://www.baxleystamps.com/litho/bettelheim.shtml>を参照。

（ベッテルハイムが言う）「那覇に日本の守備軍が屯駐している」。しかし、この屯駐兵が公然と姿を現すことはないことを、知っておかなければならない。なぜならば、琉球人は武器そのほかの軍備を持たない戦争嫌いな国民をよそおっているからである。しかし、ベッテルハイム博士はたまたま屯駐兵の一隊が武器の手入れしているのを見かけている¹⁹⁾。

日本駐留軍が自らの存在を隠す目的は明白である。薩摩藩は琉球侵攻後、中琉貿易の中から利益を獲得するために、琉球に対して実質的に支配していることを意図的に隠蔽しようとした。例えば、中国の冊封使が琉球にやってくる度に、琉球にいるすべての日本人は外出など目を引くような活動は一切禁止されることになる。日本の年号等付いているものはしまわなければならない。東恩納寛惇氏が述べたように、薩摩は琉球をどこまでも中国の附庸として擬装する必要があったので、苗字、衣服ともすべて、やまとめきたるものを禁止し、薩摩との関係を極秘にする方針を堅持しながら物心両面にわたって、薩摩から離れていかにないように嚴重監視したという²⁰⁾。『日本遠征記』に次の記述がある。

ベッテルハイム博士が琉球当局と接触するときには、いかなる場合にも常に少なくとも二人の人物が姿を見せた。この人物が会合をとりしきり、琉球の役人を操っていたのは明らかである。彼らは日本の監察官であると、博士は推測した²¹⁾。

このように、『日本遠征記』の記述は薩摩藩の琉球駐留軍の実態を反映するばかりでなく、琉球と日本の裏関係も窺い知らせてくれるものと言えよう。

三、「主権」と「実質的支配」——琉球の位置づけに関するペリー艦隊の認識

1. 「主権」、「実質的支配」と「外藩」、「近隣」

上述したように、琉球に到着した以前に、ペリー艦隊は琉球と中国の関係に対し、すでにある程度の認知を持っていた。『日本遠征記』は比較的正確で簡潔に琉球の歴史を記述した資料であると考えられる。天孫時代から三山時代まで、どれも余すところがない²²⁾。また同書はこれら記述の出所——‘Chow-

19) オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記』上、第11章、東京：万来舎、2009年4月、P492（Matthew Calbraith Perry, Lambert Lilly, Francis Lister Hawks. *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan: performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy*. Appleton and Company, 1856. Chapter 11, P254.）

20) 山里永吉『沖縄歴史物語』、東京：勁草書房1968年、P175-178.

21) オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記』上、第11章、東京：万来舎、2009年4月、P493（Matthew Calbraith Perry, Lambert Lilly, Francis Lister Hawks. *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan: performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy*. Appleton and Company, 1856. Chapter 11, P255.）

22) オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記』上、第11章、東京：万来舎、2009年4月、P490（Matthew Calbraith Perry, Lambert Lilly, Francis Lister Hawks. *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas*

Hwang' の著書にも言及している。

‘Chow-Hwang’ とは清国の琉球冊封使周煌のことである²³⁾。使者として現地にいた間、彼は地元の逸話に留意し、見聞したことを随時に記録に残した。帰国後は大量の文献を参考にしながら、著書を整理編集した。出来上がり次第、これを乾隆帝に呈上した。これが即ち『琉球国志略』である。『琉球国志略』は清代の内府が収蔵する写本のほか、刻本も何種類がある²⁴⁾。ペリー艦隊が中国広東省や上海に滞在した時に入手したものか、或いは現地で雇った中国人が持っていたものであろう。ペリーらが琉球の歴史及び中琉関係を知るうえで、重要な情報源となっていた。

『琉球国志略』などの書物を元に、またペリー艦隊が琉球へ行った実地調査などと合わせて、『日本遠征記』は琉球と中国の関係について、自らの見地を提起している。

すでに述べたように周煌は、現在同島の支配権が中国の皇帝にある、と主張している。だが、この問題を決定するのをむずかしくしていると思われる諸点のひとつは、琉球が中国と日本の双方と密接な関係にあることだった。毎年貢物が中国船で琉球から中国に送られているのは確かな事実らしい。しかも琉球の役人は中国人のように見え、教養ある琉球人には中国語を理解し話す者もいるとはいえ、琉球の日用語は中国帝国のとは違う。日本が琉球に対して有するなんらかの権利に関してわれわれは言えるのは、のちに条約の案件を協議するためペリー提督が日本委員と会見したとき、日本側が「琉球は遠隔の属領であり、(日本) 皇帝の支配は限られている」と通告してきたことのみである。琉球のほとんどが日本船で行われているのも確かである。琉球人自身の証言は、那覇の役人がペリー提督に宛てて送った書簡から引用した次の一文に語られている。「明朝の時代から中国の外藩のひとつに列せられていることは、われらが大いに誇りとするところである。また、中国は久しく我が国王に王位を授与し、われらはそれに報いて調達できるものを持って中国に朝貢してきた。我が国に関わる重大事が発生すれば、それはことごとく中国皇帝に報告されている。貢物を送る時期が来るたびに、われらはかの地(中国)で我が国のしかるべき官服と冠を作るための絹や繭紬を購入し、高位者用の薬などの物品を選んでいる。それらが我が国の使用に十分でない場合は、吐噶喇の島を経て親しい近隣の国家と交通し、黒砂糖、酒、芭蕉布そのほかの貢物として中国に送っている国産品と交換する」。ここで言及されている親しい隣国とは日本のことである²⁵⁾。

and Japan: performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy. Appleton and Company, 1856. Chapter 11, P253.)

23) 周煌、字は景桓、号は緒楚、又号は海珊、清代の四川省重慶府涪州出身である。乾隆二十一年(1756年)五月、周煌は翰林院侍講の全魁とともに琉球に行き、尚穆を琉球国中山王を冊封し、翌年一月に帰国した。

24) 乾隆年間の武英殿刻本および乾隆二十四年と乾隆三十年の漱潤堂刻本がある。

25) オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記』上、第11章、東京：万来舎、2009年4月、P491-492 (Matthew Calbraith Perry, Lambert Lilly, Francis Lister Hawks. *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan: performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy. Appleton and Company, 1856. Chapter 11, P255.*)。英語の原文では日本を‘the friendly and near nation’という。

この記述から見て、次のようなことが考えられる。まず、琉球の位置づけについては、東アジア封貢体制における「中国帝国」の外藩属国であり、海の上にある離れ島として、中国やほかの国々と海上貿易を行うことで生存発展を維持していく存在であるといえよう。薩摩にどの程度の依存があろうとしても、琉球がこのような位置づけを明確に主張していたことが分かる。ペリー艦隊の観察によると、中国が琉球の内政に直接な干渉をしていないが、琉球は中国の影響を深く受けている。ペリーに送られた那覇官員の書状の中で、次の点は繰り返し強調されている。つまり琉球は長年中国と朝貢関係を維持しており、朝貢貿易は朝貢関係の一部分ということである。琉球と日本の貿易関係に至っては、「近隣」国間の貿易としか位置づけられていない。こうして見れば、琉球は自分と日本の関係が国家間の平等関係であることを主張していた。一方、中国との関係は東アジア封貢体制における「属国」と「宗主国」の関係であるとみなしていた。

これを元にして、『日本遠征記』は、琉球は「主権」（支配権）が「中国の皇帝」に属していながら、日本からある程度の「実質的支配」を受けていたと説いている。つまり、「主権」と「実質的支配」の乖離という矛盾した状態があったのである。

次に、日本は琉球における利益を放棄したがることである。ペリー艦隊が徳川幕府と交渉を行って、那覇の開港を要求すると、日本が示した反応はやむを得ないものであった。日本が「統治権は限定的なものだ」とあやふやな表現でごまかそうとしたのは、実はアメリカ人の要求を黙認したのと同じ意味である。にもかかわらず、日本は「属国」の名目で琉球における利益を維持することを忘れなかった。『日本遠征記』の原文に 'That Lew Chew was a distant dependency, over which the crown (of Japan) had limited control.' 'Dependency' は英語で「属地」、「従属」の意味だが、私たちはこれを「属国」と訳している。日本がそうしたのは、琉球は遠い島だが、日本の支配下にあることに変わりはないことを強調したいからである。つまり、アメリカが琉球から利益を獲得してもいいが、日本「属国」の琉球を放棄してはならないという思惑である。

2. 琉球の国家意識：中国に対する「認識」と自分に対する「認識」

ペリーはその日記『ペリー日本遠征日記』の中で、琉球の位置づけに関して、自分の観察と考えを述べている。

宮古島群島は大琉球の王及び評議会が指名した役人たちによって統治されており、そして、彼ら役人たちは、日本およびその属領中にあまねく行われている陰険で油断のない政策に従ってしばしば更迭されていることを、われわれは知っています。またこれらの島々は琉球の支配下にあって、年々に税を琉球政府に払っていることも知っております。さらに聞くとところによると、琉球は日本のある王族の領土であるとのことですが、しかし著述家たちのなかには、琉球は薩摩の大名にだけ忠誠を誓っていると主張するものが何人かあります。

大島とその隣辺のおそらく属島と思われる徳島、ラトナ島（加計呂麻島）及び喜界島の住民と政

治に関しては、いままでのところすこしかわれわれにはわかっていませんが、しかし彼らもまた大琉球の支配下にあつて大琉球政府は彼らと日本帝国、あるいはたぶん薩摩の大名との間の仲介的統治権を行使しているものと推論することが公平であります²⁶⁾。

1854年7月8日、日本との調印に成功したペリー艦隊は帰国の途中で最後の琉球訪問をした。ペリーは副官ベントと艦隊の通訳ウィリアムズに上陸を命じ、琉球政府と米琉条約の協議草案についての談判に当たさせた。談判のプロセスについて、『日本遠征記』は興味深い記述を残している。

(協議の) その前文には、琉球を独立国として認めていた。この認定に摂政²⁷⁾は反対し、琉球は中国に服従する義務を負っているため、このような不遜なことをすれば、中国との間に紛争が起きかねないと述べた。協議の諸条項については喜んで同意し、また忠実にそれを履行し、ためらうことなくこの協議書に調印もするが、あからさまに完全な独立を求めるような主張やそぶりは避けたほうがよいだろうということだった²⁸⁾。

同様、ウィリアムズも彼の『ペリー日本遠征随行記』の中で自分が見た談判状況を次のように記している。

午後の会議では、条約の諸点についての意見の交換が行われた。彼ら注意深く文書に見入っていた。驚いたことには、彼らが最大な難色を示したのは全文についてであった。これには、沖縄とアメリカ合衆国とは友好条約を締結するに至ったと謳ってあった。この点が忠節を誓っている中国皇帝の感情を害するのではなかろうか、この前文で主張しているように、われわれが独立国としての立場を装うと、皇帝の激怒を買うのではなかろうかというのであった²⁹⁾。

これらの記述の中で「独立」という言葉は何か所で使われたが、意味はそれぞれ大いに違う。一方、琉球は「独立」国家としての地位を拒否したのは、中琉関係への配慮があったからである。琉球側から見れば、自分が中国王朝の「属国」である前提は変えることはできない。ペリーを代表とするアメリカ側との交渉もこの点を前提としなければならない。他方、実際には、琉球は対外関係では「独立」国家としての権利を行使できることも期待している。

26) ペリー著、金景園訳『ペリー日本遠征日記』、東京：雄松堂1989年、P289-290。

27) つまり琉球摂政の尚宏助。彼は琉球国王を代表して数回ペリー艦隊と交渉した。英文『日本遠征記』の中で彼のことを 'Lew Chow Regent' という。

28) オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記』下、第25章、東京：万来舎、2009年4月、P465 (Matthew Calbraith Perry, Lambert Lilly, Francis Lister Hawks. *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan: performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy.* Appleton and Company, 1856. Chapter 25, P569.)

29) ウィリアムズ著、洞富雄訳『ペリー日本遠征随行記』、東京：雄松堂1989年、P397。

琉球は東アジア封貢体制の一員として、中国に対する義務と義理をつけられている。「普天の下、王土に非ざる莫く、率土の濱、王臣に非ざる莫し³⁰⁾」と言われるように、琉球がほかの国と単独で条約を結ぶ場合は、琉球が「王土」であり「王臣」であるという身分を否定し、「天朝王国」とのつながりを断ち切ってはならない。したがって、この前提を抜きにした「独立」は琉球が認めるわけがない。しかし、宗主国とのつながりは比較的道義的に言う概念であり、実際の国家生存とは関係が薄いといえる。周知のとおり、東アジア封貢体制の中では、中国が属国の内政外交を直接に管理することはほとんどなく、属国は自国の管理権を「独立的」に行使することができる。だが、1609年の薩摩藩による琉球侵攻以降、琉球は新たに薩摩藩の支配下に組み入れられ、自分が付属国になった事実を隠蔽しなければならず、対外的には自分が独立した内政外交権を保持しているかのように見せかけることによって、朝貢貿易を維持しなければならなかった。そのため、ペリー艦隊の開港要求をやむなく受け入れ、「琉米修好条約」を調印した際に出し得た唯一の条件は、表面的に独立するという偽りの姿を保持し、中国、日本との関係を維持することであった。当時琉球王国が置かれた悲しい境遇そのものである。

ウィリアムスはまたその随行記の中でこう書いている。

吐噶喇（薩摩）や日本に関しては、薩摩との貿易は主として、北京へ進貢する際に中国へ持っていく逸品や見事な品物を手に入れる目的で続けているのである、と彼らはいった。彼らは薩摩との貿易については何も語りたがらず、私が鹿児島 Kagosima へも進貢しているのかどうかと尋ねても、答えようとしなかった。この中国への進貢を許されていることについては、彼らは屈辱を感じるどころか、喜んでいるふしさえ見られた。どうも彼らの薩摩に対する忠誠の義務の実態は、ひどい隷属であり、かつ、重い負担であるに違いない³¹⁾。

『日本遠征記』はさらにこう記述している。

琉球は数世紀前に日本の薩摩のある大名に征服されたとしく、この大名の後継者に朝貢しているものと思われる。中国ともなんらかの関係があるようだが、よくわからない³²⁾。

ウィリアムスは薩摩藩に支配されていた琉球の状況を正確に記録している。アメリカ人に「理解しがたい関係」というのは、まさに中国と琉球の封貢関係のことである。このような関係は琉球王国が何百年にわたって国際社会を生き残って法的地位を獲得できた礎石の働きをしていた。これについて、ペリー艦隊はよく知っていた。だが、アメリカ人である彼らは、見慣れぬ東洋の文化と東アジア特有の国際

30) 『詩経・小雅・北山』。

31) ウィリアムズ著、洞富雄訳『ペリー日本遠征随行記』、東京：雄松堂1989年、P397-398。

32) オフィス宮崎編訳『ペリー艦隊日本遠征記』下、第17章、東京：万来舎、2009年4月、P98（Matthew Calbraith Perry, Lambert Lilly, Francis Lister Hawks. *Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan: performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M.C. Perry, United States Navy*. Appleton and Company, 1856. Chapter 17, P370.）

秩序に困惑を感じなくもなかった。ペリーたちの「困惑」をもたらした原因は、彼らが知っていた近代西洋における国際関係を処理する時に使われる条約体系は西洋社会が準拠する国際秩序の原理に過ぎず、未だ東アジアに及んでいないし、この地域を規定する国際秩序は中国を中心とする東アジア封貢体制であり、中にある宗主国と藩属国の関係、属国と他国の関係は複雑で弾力性に富むものであることにある。ここで準拠されるのは伝統的な華夷秩序であり、人倫・君臣の道が何よりも重視されていた。西洋勢力の侵入によってもたらされた二つの体系の衝突は、近代東アジアに今までない大きな変化が起きたという結果を招く主な原因である。

四、おわりに

『日本遠征記』に見られるように、19世紀後半の琉球は「両属」という苦しい窮地に置かれていたにもかかわらず、東アジア朝貢体制における外藩属国という身分を必死に守ることによって、朝貢貿易の形で中国と密接な関係を維持しようとした。また、中国文化を積極的に受容・継承することによって独自の帰属感和自己同一性を保持することができた。

同時に、琉球は薩摩藩の残酷な搾取と支配に耐えることを余儀なくされながら、対外的には自国が依然として「独立国家」であるという偽りの姿を見せなければならなかった。このことに対し、『日本遠征記』がたくさんの記述をしているだけでなく、ペリー艦隊の船員たちも各自の著書の中で様々な言及をしている。例えば、ペリー艦隊の通訳ウィリアムスは次のように言っている。

私は沖縄を十七世紀、一六〇九年これを完全に征服した薩摩の属領（日本に従属するというよりも）と考えている。薩摩は沖縄の貿易を独占し、その内政と外交を統御している。利益のあがる貿易を続け、また島民の間に名ばかりでも独立国の体面を維持させるために、福州（Fuhchau）への進貢船の派遣を許しているのである³³⁾。

ペリーの『日本遠征記』の執筆人となった作家のハークスもこう書いている。

琉球の人たちは言うまでもなく東洋諸民族の中でも最も知能の勝れた民族である。しかしながら、一般の人たちは通常支配者によって無教育の状態に置かれたままとなっている。身分の高いものは、漢学をよくし、支那へは知識人や専門家、特に医者たちがその教育技術の修得のために送られる。彼らの有するものでいわゆる文学と呼び得るものはすべて支那そして日本よりもたらされたものである。

より高い文化への志向性という琉球人の好ましい傾向、そして絶対的支配者による専制統治に対し彼らが内に抱く心情などといったことから考えて、日本人による専制独裁と袂を分かった独立国の政治形態に置かれるのを琉球の人たちが最も好むところであろうとするのはあながち不当な憶測

33) ウィリアムズ著、洞富雄訳『ペリー日本遠征随行記』、東京：雄松堂1989年、P57。

でもあるまい³⁴⁾。

ペリー艦隊の認識は、琉球と日本特に薩摩との関係、琉球と中国の関係を分析する上で、または歴史上における琉球の位置づけを理解する上で、我々に貴重な手がかりを提供してくれることは疑いえないのである。

附記：本稿は中国教育部人文社科重点研究基地プロジェクト「歴史時期における琉球群島地位問題研究」（2012JDZS01）の研究成果の一部である。

34) 山口栄鉄『琉球異邦典籍と史料』、沖縄：榕樹書林1997年、P90.